

# 卒業後の相談事例の検討

## Examination of the graduate counseling cases

弘前大学保健管理センター 田名場 美 雪

**要 旨：** 卒業生からの相談事例を整理し、保健管理センターのカウンセラーとして関与することの意味を通して学生相談について検討した。相談内容は「仕事に関連するもの」（卒業後の就職活動のつらさ、心身の不調、教員採用関連）と、「仕事以外のもの」（学生時代のふり返り、コンサルテーション）に大別できた。卒業後に相談を求める者の多くは、卒業期にかけて来談していた。在学時に現実的な課題解決に終始し、内的な課題を残したまま卒業を迎え、そして社会への橋渡し機能をもった中間的対象を求めていると解釈できる。

**キーワード：** 学生相談、卒業生、卒業期

### 1. はじめに

学生相談の主な目的として、鶴田（2001）<sup>1)</sup> は次の三点をあげている。①学生生活上のさまざまな問題に対して心理的な援助を行うこと。②学生の発達や成長を支えるための援助を行うことであり、青年が大人になることを見守ること。③学生の心の健康への援助を行うことであり、学生がこのような問題を持ちながら学生生活を送ることを援助すること。この目的に沿って、クライアントである学生に対してさまざまな援助活動を行う。学生相談としての援助活動の大きな特徴は、その期間が卒業までと明確に定められているという点だろう（鶴田1994<sup>2)</sup> , 1995<sup>3)</sup>）。

しかし、卒業生・修了生およびその保護者から、相談を受けることもある。直接来談することもあれば、電話メール、手紙を介してのこともある。

これまでの卒業生からの相談事例を整理し、保健管理センターのカウンセラーとして関与することの意味を通して学生相談について検討する。

なお、修了生からの相談については、次の2つの理由から今回の検討の対象とはしない。第一に、卒業生からの相談とその質的に異なる可能性を否定できないことである。第二に、修了生からの相談が量的に不十分なことである。

### 2. 相談の概要

#### ①利用者の概要

在学時に相談歴のある者がほとんどを占める。例外として、在学時の指導教員から紹介された者があげられる。このことから、カウンセラーに事前情報が全くない状態で相談を受けるという事態とはならない。在学時における来談時期は、ほとんどが卒業期にかけてである。男女の比率に大きな偏りはない。

治療歴については、在学時、卒業後に関してほぼ半数近くの者が有している。

#### ②相談の手段

来談による相談が半数以上を占める。中には遠隔地から来る者もいる。それ以外については、ほとんどが電話による。

#### ③相談時期と相談回数

ほとんどが卒業・終了後数年以内、うち半数近くが一年以内である。そして相談回数は一回から数回で終わっている。

#### ④相談内容

相談の内容は、大きく「仕事に関連するもの」「仕事以外のもの」に分けることができる（表1、参照）。

「仕事に関連するもの」はさらに3つに分けることができる。第一に「仕事が見つからなくて、つらい」に代表されるような卒業後の就活に関するものがあげられる。第二に「就職したが心身の不調から退職を余儀なくされた」「就職したが病気が再発し、休職中、退職するかどうか迷っている」といった就職後の心身のバランスの取りにくさに関するものをあげることができる。この場合、在学時もしくは卒業後に治療歴をもっているということが特徴的である。第三にいわゆる講師採用に関するものである。講師採用とは、教員採用試験に合格し教育公務員になった者とは異なり、年度ごとに雇用契約を結ぶ臨時職員的な教諭のことを指す。たいていの場合、正規採用を目指し、次年度教員採用試験受験の準備をしながら教壇に立つことになる。そういった講師採用になった者が、仕事と受験勉強の両立の困難さから、あるいは雇用先での人間関係から心身の調子を崩すといった危機的状況に陥ることがある。

「仕事以外のもの」は2つに分けることができる。第一には「学生時代の振り返り」である。この相談は、すべて在学時に相談歴をもつ者であり、指導教員との人間関係のトラブルに悩み、その問題を公にすることを回避した者である。卒業や進学を断念した者もいる。未解決の問題をかかえて大学を去っていったということになる。第二には「コンサルテーション」である。実際には、家族を医療機関に受診させたいという趣旨の相談である。この相談には、在学時に治療歴をもたない者が多いことが特徴である。

以下、各分類の典型例を示しながら、問題点を探ることとする。なお、各事例はプライバシーに配慮し、個人が特定されない程度に修正を加えてある。

表1 卒業後の相談内容の分類

仕事に関連するもの
・ 卒後就活のつらさ
・ 心身の不調
・ 教員採用試験関連
仕事以外のもの
・ 学生時代の振り返り
・ コンサルテーション

### 3. 卒業後の就職活動のつらさ

就職先未定のまま卒業し、卒業後にあらためて就職活動を行っているが、なかなか決まらずつらい、こういった問題をかかえて相談に訪れるのは、在学時に精神疾患に罹患し、治療をしながら卒業していった者である。規定の年数で卒業する者もあれば、休学や留年を経た後、卒業にいたる者もいる。単位を取得し、卒業論文を完成させることで精一杯であり、就職活動との両立を実質的に断念した者である。在学時には「卒業して社会に出るのがこわい」と悩み、卒業してからは「どこにも行けずにつらい」と悩んでいる。

#### 【事例1 休学・留年・卒業後に就職活動を始めたA子さん】

##### 1) 在学時の相談内容

県外出身者のAさんは、入学直後、他人の視線が気になって授業に出るのがつらいと、相談に訪れた。保健管理センターで紹介された病院での治療を受けながら、学生相談に訪れていた方である。強い症状のために、教室に入ることができない時期があり、また勉学に集中できず思うように単位を取れなかった。少人数でのゼミやディスカッションではひどく緊張し成果を上げることができなかった。その

間、幾度か希死念慮が生じ、カウンセラーから実家へ連絡したこともあった。保護者はすぐに駆けつけてくれるが、カウンセラーと話をするということがなかった。医師からの強い要請により、保護者はA子さんの病状について医師から説明は受けている。療養のために休学した時期もあったが、指導教官の温かい指導のもと、卒業を果たすことができた。就職に関しては、主治医から障害者の認定を受けてその枠内での就職という選択肢もあるという説明を受けている。A子さんは普通の人と同じように働く自信はないが、障害者としての認定を受けることには消極的であった。保護者はその話を聞くと一笑に付したという。卒業後にあらためて就職先を探すということになった。進路未定のままの卒業であった。実家は遠隔地にあったが、卒業後もA子さんは学生時代のアパートにそのまま暮らし続け、通院も継続していた。保護者から「仕事が見つかるまで、弘前でがんばりなさい」と言われた。休学中も長期休暇中も、帰省に関して保護者からの了解を得ることは難しかった。カウンセラーは卒業まで、A子さんの「とにかく卒業したい」という気持ちを支え、寂しい気持ちに付き合っていたと言える。

## 2) 卒業後の相談内容

卒業後半年経った頃、A子さんは、どのような仕事に就いたらいいのかと相談に訪れた。ようやく見つけた就職先も、「そんな仕事、大卒でなくてもできる」という親の言葉に否定された。アルバイトをしながら就職活動を続ける中で、A子さんは何度となく調子を崩しそうになった。しかし在学時とは異なり、希死念慮が生じたり症状が激化することはなかった。「卒業できたことが自信になっている」と言う。保護者は、A子さんがきちんと就職活動を行っているか電話やメールを頻繁によこし、A子さんを苦笑させた。A子さんがなんとかふんばっていられるのは、卒業できたという事実と、通院先で巡り会えた友人の支えがあるからと言う。通院先のソーシャルワーカーとの面談も繰り返し行われていた。

「先生との付き合いももう何年にもなりますね。卒業してもまだこうやってお世話になっているなんて申し訳なく思います。頼らないようにしたいのですが、ほんとうに困ってしまって・・・」とつぶやきながら、数ヶ月おきに相談に訪れたA子さんであるが、何年経過しても就職が適わず、保護者がついに「実家に戻ってこい」と言ってくれ、ようやく故郷へ帰ることができた。

## 3) 事例の特徴

A子さんに代表される事例の問題点として、卒業の時点で就職に関するある程度の方向性を定めることができなかつたこと、A子さんの現状認識と保護者の現状認識に大きな隔たりがあったこと、そしてその隔たりを在学中に埋めないままに卒業に至ったことがあげられる。

障害や病理がある学生へのキャリアカウンセリングについて、嘉部(2006)<sup>4)</sup>は「このようなケースで大事なものは本人を含めた家族(場合によっては親族も含む)、医師、大学、会社全体の環境を調整しながらカウンセリングを進めることである」と述べている。この指摘のような全体による環境調整は欠落していた。また、A子さんが自分自身の病理を現実的に受容できるようになるまでにも相当な時間がかかった。この作業が、卒業時に間に合わなかった。そのために、就職活動に向けての適切なスタートが切れなかったと言える。卒業後にA子さんは自身の病理を理解し、それに沿った就職を検討し始めたが、保護者の側における現状認識が追いつかず、成就することは適わなかった。とは言え、在学時は親のためという思いから頑張りすぎて調子を崩すことも多かったが、卒業後は親との関わり方に前進が見られる。A子さんのペースで確実に成長していると言える。

在学時に治療歴をもち卒業後に相談する者のほとんどは、A子さんと同様に保護者との認識に隔たりがある者、あるいは本人による認識が非現実的である者であった。このことから、卒業後にも精神症状が続く、あるいは治療の継続が必要と予想される場合には、在学中に本人と保護者による認識の隔たりを埋める支援をすることが肝要であると言える。

#### 4. 就職後の心身の不調について

この相談内容は、就職はしたが、環境の変化や人間関係、職場のもっている特殊性が引き金となり、治療を必要とするほどの心身の不調を生じたが、職場の理解を得ることが難しく、退職や休職を考えざるを得ないといったものである。この相談をする者のほとんどが在学時に相談歴をもっており、うち半数ほどに治療歴がある。いずれも卒業時には安定を保ち、卒業研究と就職活動を両立できた者である。

##### 【事例2 就職後不調を来したが再就職を果たしたBさん】

###### 1) 在学時の相談内容

3年生の後期、県外出身のBさんは、同じ研究室に所属する同級生による嫌がらせ行為について相談に訪れた。強い怒りや恐れといった感情がわき上がり、不安定になった時期はあったものの、なにより研究意欲が人一倍強かったため、数日の休養の後から、それまでどおり研究室へ通い研究を続けた。嫌がらせ行為についても、Bさん自身の傾向（思ったことを何でも口にしてしまう）にも原因があったことに気づき、指導教員の立ち会いの下に、同級生と誤解をとくこともできた。

研究室内での問題が一段落した後、Bさんは相談に通り続けた。もともと人間関係が苦手だったというBさん、日頃から不満や不安を感じることも多かったという。相談の中では、母との不和がたびたび語られた。サークル仲間を支えられながら卒業研究と就職活動を両立させ卒業を果たした。最後の面接では、友人との卒業旅行について語られた。

###### 2) 卒業後の相談内容

就職して半年後、Bさんが突然訪ねてきた。憔悴しきった様子であった。希望して就職した会社だったが、勤務時間が不規則であること、上司が理不尽に怒鳴り散らすこと、そもそも仕事内容に違法性を感じることに、実家の父親が大病を患いそれが気がかりであること。それらが重なり、「おかしくなっていました」とのことだった。この日は休暇を取っての来訪であった。不眠や焦燥感、食欲減退がみられたので、Bさんの居住先の治療期間への受診をすすめた。

その後、電話で何度か相談があった。受診した病院で鬱状態であると告げられ、自分でも納得した。定期的な通院と服薬をすすめられ、同時に勤務時間の調整をしてもらうことをすすめられた。通院のために休みが必要だが、休暇申請するたびに嫌みを言われる。勤務時間の調整を相談できる部署や人間がないので、仕方なく上司に相談したところ、理解してもらえないどころか、怠けているとののしられた。同期入社した何人かが既に見切りを付けて辞めてしまった。今まで以上に労働環境が悪化している。

次の電話をもらったときには、退職し実家に戻っていた。その頃にはすっかり調子を崩していたことと、体調が回復しても安心して勤められる会社ではないと判断してのことだった。しかし、保護者にとっては予想外のことであり、「うちでもこんなに大変なときなのに」と、とりわけ母親からはずいぶん責められた。Bさんは知らなかったが、父親の大病の他に、兄の離婚、妹の受験と、実家では難題を抱えていた。実家に戻ったものの、療養できる状況ではなく、ますます不安が募り、一時は希死念慮を抱くほどになった。就職のことは保留にし、睡眠と食事をきちんととり、家の中でできること（妹へ勉強を教える、父親の看病など）を少しやってみることをすすめた。

父親はBさんを一切責めず、はげまし、再就職についての情報を与えてくれたという。Bさんは徐々に安定を取り戻し、思い切って就職活動を再開。「前回の失敗を生かして、時間をかけてさがしました」と、新たな就職先を見つけたという電話での連絡があった。

###### 3) 事例の特徴

就職先で調子を崩す者もいる。在学時代に治療歴をもっているなど、脆弱性のある者にはそのリスク

は高いものと思われる。しかし、そうではなくても、このBさんのように、予想外のことが一度に重なると、一時的にリスクは高まると言える。

就職先での出来事は不運と言えるだろう。幸い、Bさんの父親は、実家に戻ったBさんの理解者となり、道案内人となってくれた。キーパーソンとなる人の存在は重要である。近くに理解者がいること、このことが体調回復と社会人としての再スタートを促進したと言える。その他の促進要因として、次のことをあげることができよう。Bさんの場合は、卒業期にかけて相談歴があったこと、体調を崩したのが卒業間のない時期だったことから、保健管理センターを利用しやすかったと言える。早い時期に専門機関へ相談することが重要と言える。

Bさんは家族の理解を得ることができたが、卒業後の相談者の中には、職場の理解はもちろんのこと、家族からも理解されず、病状を悪化させ長期化させた者もいる。卒業生であることや、県外の居住者であると、大学カウンセラーから家族に連絡を取ることはためられる。医師を通じて説明してもらうよう、本人アドバイスするのだが、現実的な効果のほどは正直自信がない。

## 5. 教員採用試験関連

正規採用ではなく、いわゆる講師採用となり一年契約で教職に就いている卒業生は、次年度採用を目指し受験勉強をしながら、教壇に立つ。受験準備中であることを配慮してくれる採用校もあれば、特別な配慮はなく一般の教員と同じ扱いをする採用校、若いから、独身だからということで部活動や学校行事を積極的に担当させる採用校、様々あるという。

### 【事例3 正規採用までの紆余曲折を経験したC子さん】

#### 1) 在学時の相談内容

2年生の春、県外出身者のCさんは「劣等感をなんとかしたい」と訪れた。大学に真面目に通い一年を過ごしたが、成績表を受けとってみると、遊びながら過ごした友達よりも成績が悪かった。自分が惨めに思えたとのことだった。実家は経済的に苦しく、無理を言っているの大学進学である。運動部に所属した。Cさんはいつもお金がないことを嘆いていた。お金がないから、運動用具も新調できない、専門書を買えない、飲み会の誘いを断らなければならない、おしゃれができない。そして、一度も異性と付き合ったことがないことに負い目を感じていた。周囲は生き生きと恋愛を楽しんでいる。自分だけが、毎日お金のことを考えて難しい顔をしてつまらなく生きているような気がする。いつも周囲と比較して落ち込んでしまう。他の人がうらやましくて仕方がない。恋愛をしなければならないという思い込みもあった。しかし、専門の勉強が本格化する頃には、劣等感や思い込みからはだいぶ自由になっていた。片思いと失恋を経験して、恋愛への思い込みも整理されていった。

Cさんは数学の教師を目指していた。卒業と同時に正規採用となる確率は低い。数年の講師採用を覚悟しながらも準備を進めていた。大学の所在地である青森県と、出身県の教員採用試験を受けたが、どちらも正規採用には至らなかった。実家から通勤できる可能性のある地元で講師採用を待つことにした。しかし、卒業式前日に届いた採用通知には実家から通勤できない学校名が書かれていた。卒業式当日、Cさんは「とにかく正規採用目指して、頑張ります」と挨拶に来た。

#### 2) 卒業後の相談内容

そんなC子さんから、夏のある日電話が来た。「生徒指導について教えてほしい」とのことであった。勤務先は地元でも有名な“荒れている”学校だった、授業どころではない。同僚である教師たちにも意欲が感じられず、鬱屈としている。休みがちの教師もいる。新米のCさんに生徒指導を任せっきり

し、家庭訪問や警察・児童相談所との交渉も行わなければならない。自分の実力のなさを痛感するが、半人前の自分に任せっぱなしの学校側にもあきれてしまうと言った。生徒指導や非行についての専門書を紹介し、相談できる教師を見つけるようすすめた。

そのほぼ1年後、再度電話があった。結局今年度も正規採用には至らず、講師として勤務している。別の学校である。その年度半ばでCさんは体調を崩してしまった。今度こそという気持ちで取り組むが、この中学校では部活動を任された。放課後の指導はもちろん、週末、夏休みの指導、大会遠征の引率である。教員採用試験は不合格であった。そのうち「夜眠れなくなって、食欲もなくなり、疲れやすくなったので病院に行ったらストレスと言われました」。学校には無理を言って、一週間ほど休みをもらった。その間、自分の将来を考え直した。このまま教師を目指し続けてもいいのか。数学は好きだが、だんだん学校が嫌いになってきた。何年でも正規採用を目指すつもりだったが、自信がなくなってきた。しかし、今更別の道といっても思いつかない、そのような話であった。最初の赴任校よりも仕事はきつくないということであったので、これまでの疲れも出たのだからうまく休養をとること、仕事に慣れるのと同時に自分の時間を作る工夫もしてみることをすすめた。

その翌年、電話が来た。正月休みに帰省した折、両親に話してみた。父親からつらくても三年はやってみなさいと、どうしても続けられないと思ったらやり直せばいいと言われ、自分でもなんとなくそう思えた。今まで一人で空回りしてきたような気がする。甘いかもしれなど数ヶ月でいいから受験勉強する時間がほしいと、学校に言ってみますということであった。

念願の正規採用になったという手紙が届いた。

### 3) 事例の特徴

Cさんが卒業後突き当たった問題、数年にわたる講師勤務を余儀なくされること、学校業務と受験勉強を両立することは、競争倍率の高い地域で専門科目の教員を目指す人たちに共通する問題と言えよう。赴任校では教員としての現実に直面して大きな衝撃を受けたものと思われる。しかし、在学中に劣等感のある程度克服できていたので、自分を過度に責めることなく現実的に対応できている。さらに、Bさんの場合と同様に、社会人としての先輩である父親からのアドバイスがあった。

講師採用になった者の中には、正規採用に至らない者もいる。数年して断念し、別の道を探る者もいる。心身の調子を崩して、療養中の者もいる。

現在のところ、講師採用になった者からのみの相談であるが、いわゆる就職浪人にあたる者も同様の悩みをもっている可能性がある。

## 6. 学生時代のふり返し

すべてがハラスメントに関わる内容であり、在学時に相談歴をもつ。一時的に医療機関を利用した者が3分の1程度である。

ハラスメントと言っても、ハラスメントとして正式に申し立てを行ったわけではない。相談内容からハラスメントの可能性が高いが、おおごとにしたくないという来談者の希望により、申し立てを行わずに、対応し、卒業後にその意味を問い直すという相談内容である。

### 【事例4 関係の悪かった指導教員と就職先で再会したDさん】

#### 1) 在学時の相談内容

3年生の冬、研究が進まない、指導教員と合わないということでDさんは訪れた。指導教員から嫌われているような気がする。学外で行われる研究会の誘いが自分にだけこなかったり、飲み会の誘いがこ

なかつたりする。ゼミの他のメンバーには連絡があるらしい。廊下ですれ違って挨拶をしても、無視される。ゼミでの発表でも自分にだけ何のコメントもない。癖のある先生だと聞いていたが、自分は大丈夫だと思っていた。最低限の指導はしてほしい。質問に行っても、自分で考えろとしか言ってくれない。他の人が質問に行くとき普通に指導をしている。教員の態度がそのような感じなので、仲間たちも次第に自分を避けるようになってきているように感じる。最初は気にしないようにしていた、我慢していたが、最近ではその教員の足音や声を聴くだけでこわい気持ちになってしまう、そんな自分を情けなく思う。

ハラスメントの可能性があるが、どのような対応を望むか尋ねたところ、大学院進学を希望していることもあり、おおごとにしたくない。逆恨みされてますます居心地が悪くなると思うとのことだった。専門としている分野は実質的にその教員のみということだったので、指導教員の交代も非現実的であった。それでも比較的専門領域が近く信頼できそうな教員に心当たりがあったので、その教員の助言を得ながら卒業研究を進めた。大学院進学は断念。急速就職活動に切り替えた。思いも寄らない、しかも遅い就職活動スタートであったので心配したが、粘りに粘って専門を生かした希望通りの就職先を得ることができた。「いろいろあったけど、どこにでもああいう人はいるという勉強になったと思うことにしています」と言って卒業していった。

## 2) 卒業後の相談内容

そんなDさんから、その年の夏の初め、突然電話が来た。「今日、先生が職場に来たんです」。Dさんに会いに来たのではない。研究上の正当な理由があつての来訪だった。用件が済んだ後で、上司に向かって「Dさんはこのとおりだから、どんどんしごいてやってください」と言って去ったという。上司たちはもちろん真に受けてはいない。自分はその場では平静を装うことはできていたと思う。しかし、怒りがこみ上げてきた。自分が我慢してきた2年間は何だったのか、なんで自分は進学を断念して、あいつがのうのうと大学にいるんだ。ちょうど外周りの仕事に行く時間だったのよかった。今車の中から電話しています。悔しくて悔しくて、どうしていいかわからなくて電話しました。途中から涙混じりになった。職場内で冷静な対応をしたことを認め、悔しい気持ちはわかると思うと告げた。深呼吸をすること、車の運転には十分に気をつけること、翌日再度電話することを約束した。

その翌日、約束どおり、Dさんから電話が来た。教員の来訪によって一時的に不安定になっているようであった。母親にSOSを出して一週間ほど一緒に過ごしながら安定を取り戻していった。それでも指導教員のことを思い出すと眠れなくなり感情が不安定になるとのことだったので、医療機関受診をすすめた。半年ほどの服薬とカウンセリングで落ち着いた。その間、数回、電話での相談があった。

年度が切り替わり、職場では新しい企画を任せられ、手探りで必死に取り組んだ。先輩たちに叱咤激励されながら、全うした。その年の暮れ、出張のついでで来ました、とDさんが訪れた。学生食堂で食事をした後、保健管理センターへ向かう途中、偶然に指導教員を見かけたが、自分でも不思議なほど動揺しなかった。「絶対、大学には近づきまいと思っていました。こうやってまた大学に来るなんて思ってもみなかった。良かったです。やっと卒業できたような気がします」と笑いながら帰って行った。

## 3) 事例の特徴

研究室で教員からハラスメントを受けた学生たちの中には、環境調整を求めたり、双方の誤解を解くための話し合いを求めたり、教員への何らかのサンクションを求めることもある。こうしたアクションを起こすことにはある程度リスクを伴う。なるべく穏やかな方法で、思ったとしても不思議ではない。

Dさんはアクションを起こさないことを選択した。卒業研究と就職活動を無事に済ませることに専念し続け、指導教員への感情を扱うことや、大学院進学を断念することの意味を扱わなかったことから、卒業後にそのやり残した課題が表出したと言える。

Dさんのように、卒業期に指導教員との関係に悩む学生は少なくない。相性の悪さであったり、勘違いであったり、ハラスメントにいたるものもある。事案が重大になるほど、そしてその問題を正面から扱わないほどに、卒業後に不快な思いを抱え続けたり、Dさんのように何か引き金になり、一時的に不安定になる者もいる。

吉武(2008)<sup>5)</sup>はハラスメント被害を受ける人が被る可能性のある影響として次の三点を挙げている。第一に、社会的力への自信低下・喪失、社会への恐怖心といった精神的影響である。第二に、長期のストレス、抑うつ症状、自殺念慮、心的外傷体験など心身への影響である。第三に、将来に対しての自信低下・喪失、さらには経済的損失といったライフキャリアへの影響である。ハラスメントの起きない大学環境を整えることの重要性を痛感する。

## 7. コンサルテーション

この相談の内容は、病理や障害をもつ家族への対応の仕方や、医療機関の選び方・受診の仕方についてである。相談に訪れる者のほとんどが県内出身者であることが特徴であろう。相談の手段も電話やメールではなく、来談である。在学時に相談歴をもつ者、来談歴はもたずとも指導教員からの詳細な情報とともに紹介されてくる者がほとんどである。受診希望しているのは相談者ではなく、相談者は家族を受診させたい、家族を支えたいと希望して訪れていることが特徴である。

### 【事例5 親を説得し、きょうだいを医療機関へつないだE子さん】

#### 1) 在学時の相談内容

三年生の秋、自宅生のEさんは研究室の人間関係に悩み、相談に訪れた。真面目で控えめなEさんは、活発な同級生たちに圧倒され、息苦しさや居心地の悪さを感じていた。特定の人物がEさんに悪意を抱いているのでもないということはわかっているが、研究室に近づくと頭痛がひどくなった。指導教官の配慮で研究室の利用時間を工夫したり、課題の取り組み方も柔軟に対応してもらうことができた。入学してからずっと居心地の悪さを感じていた。研究室配属となり、少人数で時間を過ごす生活となり、その居心地の悪さは強くなったと言う。Eさんは自宅生であった。自宅で過ごす時間の多くなったEさんに、母親は容赦ない言葉を浴びせたという。怠けているとか、卒業できなかつたら辞めろとか言うんです。研究室でも自宅でも息を潜めていた。自宅から離れたい、専門の知識を生かしたいという一心で、体調不十分の中、慎重に就職活動をすすめた。県外の小さな町に希望の就職先を見つけた。

就職が決まったことで肩の荷が下りたのか、研究室で過ごす時間も少しずつ増やすことができた。苦手な印象の強かった後輩の意外な一面を知り、研究室内での緊張も和らいでいった。少し疲れましたが、これで安心しました、と卒業していった。

#### 2) 卒業後の相談内容

卒業して二年が経って、一通の分厚い手紙が届いた。相談したいことがある。今度休暇を利用して弘前へ行くので会ってほしい。手紙には相談内容の背景が綴られていた。相談したいのは実家で両親と暮らしているきょうだいのことであった。在学時に家族構成を尋ねられたとき、一人っ子であると言ったが、実はきょうだいがある。高校生の頃から様子が妙になり、以来家にこもったままである。日常の様子とEさんの懸念が綴られていた。Eさんはこれまでに何度か両親に、きょうだいについて専門家に相談した方がいいのではないか、このままでいいのかと言ってきた。そのたびに両親は、大袈裟にするなど強く叱ったという。社会人となり家を離れ、ますますきょうだいのことを何とかすべきだという思いが強くなった。しかし、頑固な両親をどのように説得したらいいのか、適切な専門機関がどこにあ



るのかわからない。相談に乗ってほしいとのことであった。

E子さんと会い、準備した資料を渡し、具体的な手順などを話し合った。直接話をしたのはこの一度のみである。その際、在学時相談に訪れていた頃、何度かきょうだいのことを話そうかと思ったが、できなかったということが語られた。その後、数回メールでやりとりがあった。時間はかかったが、両親も納得しきょうだいを専門機関につなぐことができた、E子さんが考えていた以上に、両親はきょうだいやE子さんのことを気にかけていたようだ。両親に対しても、一緒に暮らしているときよりも息苦しい感じがしなくなりました、という手紙が届いた。

### 3) 事例の特徴

学生時代のE子さんはまだ“保護される側”であったが、卒業し社会人となり“保護する側”になった。成長し大人になるとはこのようなことなのだと思う。在学時の相談では、研究室での過ごし方や、研究室メンバーとの関わり方、就職活動のパワー配分など目の前に横たわる問題の解決に終始してしまった。家族関係に引っかかりを感じつつも、卒業という時期を控えているため、筆者もそのことを扱うことはしなかった。

卒業し社会人として数年の経験を積み、E子さんはきょうだいの将来について両親と正面から話し合う覚悟ができた。そしてその覚悟を現実のものとするための情報収集に、卒業後相談に訪れたと言える。

## 8. まとめ

卒業後に相談に訪れる者のほとんどは、在学中、卒業期にかけての相談歴をもつ者であった。通常の学生相談の場合、その相談内容には、自分自身の性格のことや、対人関係（友人、異性、家族、研究室など）、学業進路、授業に出てこない友人について、研究が進まないことなど、大学生活を彩るすべての事柄が盛り込まれている。一方、卒業後の相談内容は、仕事に関連したもの、在学時の相談でやり残した課題の解決、家族についてなど、内容が限定されていた。社会人にふさわしい内容へと変化していると言える。

相談時期についても、ほとんどが卒業後一年以内である。前述のように在学時の相談時期が卒業期にかけてであることを考え合わせると、大学から社会への移行の時期に該当する時期である。

相談回数も節度をわきまえたものである。相談に訪れる者も、カウンセラーも「在校生ではない、卒業生だから相談回数も時間にも限度があるだろう」ということを意識していたと考える。卒業期に来談し短期間で終結した事例について、鶴田（1995）<sup>3)</sup>は「大学生生活の終点や卒業までの残された時間を暗黙のうちに意識し、短期間で集中的な心理的作業を行った事例が多くみられた」と述べている。卒業生による相談も、正規ユーザーではないことから短期間で解決の方向を探ることが行われると言える。ただし、病理を抱えた者で、身近な人間から支援を受けることのできない者は例外と言える。その場合は、支援を受けることのできる準備が整うまでの間、非正規ユーザーとしてA子さんのように数ヶ月に一度という控えめなペースで関わることになる。

鶴田（1994）<sup>2)</sup>は、比較的健康な学生からの相談を分析し、「卒業期は大学生生活の終点であり、社会生活への移行期であり、青年期好機の終点に近い一時期である。この時期の学生相談では、終点を意識しながら親子関係、大学生生活をふり返り、自分にとっての大学生生活を意味づけ、自分を受け入れる作業が行われた」と述べている。A子さんのように病理を抱えながら学生生活を過ごした場合、Dさんのように卒業直前まで就職活動等に追われた場合、E子さんのように細々と卒業研究を続けていった場合、現実的な課題の対応に終始し、内面的な課題にまで至らない。卒業期の学生相談について、鶴田（2001）<sup>6)</sup>は「学生の見かけ上の適応を支えつつ内面を整理すること、卒業期の混乱を支えることを

通して、学生の過去と現在と将来を結びつけることが必要である」と述べている。卒業までに内面の整理が行われず、卒業後に内面の整理を手伝ってくれる第三者を見つけることができなかつた場合に、大学の相談機関を利用したと考えることができよう。

細野(2008)<sup>7)</sup>の指摘によると、「学生相談におけるセラピストは家庭と社会の橋渡しの役割をもつた中間的対象となる。むろん、中間的対象は親戚や教員が果たすことも可能だが、そのような機会を得ることが困難だったため、クライアントは学生相談を訪れる。すなわち、卒業後に相談を求める者は、課題を残したまま卒業を迎え、社会人への移行、保護する側への移行を支える中間的対象を求めていたと解釈できよう。

「やっと卒業できたような気がします」というDさんのことばが表すように、学生期に解決すべき課題を整理することができたときに、卒業できたと実感すると言えるのではないだろうか。

#### 引用文献

- 1) 鶴田和美 2001 大学教育を支える学生相談 鶴田和美編『学生のための心理相談』培風館
- 2) 鶴田和美 1994 大学生の個別相談事例から見た卒業期の意味 心理臨床学研究12(2)
- 3) 鶴田和美 1995 学生相談における時間の意味 心理臨床学研究12(4)
- 4) 嘉部和夫 2006 キャリアカウンセリングと学生相談 臨床心理学32 金剛出版
- 5) 吉武清實 2008 東北大におけるハラスメントの防止・相談・対応 東北大学高等教育開発推進センター編『大学における学生相談・ハラスメント相談・キャリア支援』東北大学出版
- 6) 鶴田和美 2001 卒業期の特徴 鶴田和美編『学生のための心理相談』培風館
- 7) 細野 仁 2008 学生相談という場における心理療法プロセスの特徴 心理臨床学研究26(4)